様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　２０日現在

機関番号：３４５１０
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０１９２
研究課題名（和文）　中世歌題集成書類の基礎的考察

研究課題名（英文）　Basic Study on Compilations of *Kadai Shusei* Documents in the Middle Ages

研究代表者
藏中　さやか（KURANAKA　SAYAKA）
神戸女学院大学・文学部・教授
研究者番号：８０３０９４２６

研究成果の概要（和文）：中世中期から江戸初期にかけて相当数が流布したと考えられる歌題集成書類を収集し、それらの相互の関係や取材源の解明、各歌題集成書類の諸本分類、位置づけを明らかにするために必要な基礎的研究をおこなった。研究対象書目を個別に閲覧調査の上、紙焼きを入手し、その本文はフルテキストデータ化し内容の検討を重ねた。その結果、佚書と考えられていた『袖中題鈔』が国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』①に含まれていることを明らかにするとともに、同類の書が複数存在することやその内容が江戸期に版行された『和歌組題集』の一部となっていること等を示した。また『明題古今抄』については、本文を翻刻し、諸本関係や資料的価値を明示した。本研究により、和歌史における歌題集成書の意義を、今後、一層解明することが可能となった。

研究成果の概要(英文):This research project has collected compilations of *Kadai* documents, which were profusely circulated from the mid-Middle Ages to the early Edo period, and carried out a basic research to clarify their mutual relationship and information resources, categorize manuscripts of each compilation of *Kadai,* and locate them in the history of *Waka*. As a result, it is elucidated that *Shuchudaisho*, whose text had been considered lost while the title alone survived, is actually included with full text in *Kumidai Shusei* (*A Compilation of the Sets of Combined Themes of* Waka)① owned by the National Museum of Japanese History, and that several of similar books exist today, and that their contents have become a part of published *Waka Kumidaishu* in the Edo period. Moreover, the text of *Meidai Kokinsho* was reprinted into plain letters and its relation to transcriptions and its value as historic data were defined. This project has enabled further clarification of the significance of compilations of *Kadai* in the history of *Waka*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	400,000	120,000	520,000
２０１０年度	200,000	60,000	260,000
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：国文学・中世文学・和歌文学・歌題集成書・題詠・組題・明題古今抄・和歌組題集

１．研究開始当初の背景

歌題集成書は、従来、その史料性の高さが指摘されながら十分に活用しうるだけの本文整備が進んでいない作品群で、包括的な研究の進展が嘱望されていた。

この分野の研究に先鞭をつけたのは井上宗雄氏である。同氏は「『類題鈔（明題抄）』について―歌題集成書の資料的価値―」(『国語と国文学』第 67 巻第 7 号　1990 年)及び「『明題部類抄』をめぐって―中世成立の歌題集成書の考察―」(『鎌倉時代歌人伝の研究』風間書房　1997 年)において、各書の紹介や書目ごとの諸本分類等示され、その資料性に注目すべきものとして歌題集成書を取り上げた。

しかし、その後、同分野に関する積極的な研究はなされておらず、本研究の開始は、未開拓分野へのアプローチという点からも意義が認められた。歌題集成書類を対象にする本研究は、文学性に乏しく地道な作業の積み重ねが必要なもので研究進行には相当な時間がかかる。しかし、その成果は他研究者も使用可能な研究資料として提供することが可能で、学界に寄与するところが大きいと考えられた。

２．研究の目的

本研究は、歌題集成書と、これまで未整理のままになっている歌題集成書の一部や類題集の題のみを抜書した歌題を列記した史料類（以下、「歌題集成史料類」とする）を対象とする。

その研究目的は「歌題集成書類相互の関係の解明」「各歌題集成書の組成、取材源の解明」「各歌題集成書の諸本分類」「各歌題集成史料の位置づけ」にあり、歌題集成書が近世にいかに展開していくかを考察するための足がかりを得ようとするものである。また未公刊の史料については研究に資する形で学界に提供することを目指す。

主たる対象の具体的書目を示すと、中世から近世に成立した歌題集成書である『明題部類抄』・『類題鈔』・『明題古今抄』・『和歌組題集』・『増補和歌明題部類』である。これらにこれまで未整理になっている歌題を列記した史料類を〈歌題集成史料類〉として加え、相互関係を考察する。また個々の書物の成立事情や享受者、また個別の伝本間の書承関係等を明らかにする。この過程において、歌題集成書が近世へ展開していく実相も具体的な形で考察し、和歌史の中で歌題集成書類がどのように位置づけられるのか、を導くことを最終的な目的の一つとする。

３．研究の方法

研究代表者は、活字で研究に供されている『明題部類抄』・『類題鈔』をフルテキストデータ化してこれまでの考察の際に用いてきた。

本研究では、さらに版本である『増補和歌明題部類』上・下、『増補和歌組題集』の他、『明題抄抜書』（静嘉堂文庫蔵）・『明題古今抄』（陽明文庫蔵）・『明題古今抄』（井上宗雄氏蔵）・『和歌題林抄』（大東急記念文庫蔵）、『和歌組題集』（未刊和歌資料集本）・『出題集』（陽明文庫蔵）・『組題集成①』（国立歴史民俗博物館蔵）等をフルテキストデータ化する基礎作業を完了した。

データ化するに際しては、可能な限り、原本を披見することを心掛け、場合によっては異体字を通行の字体に置換する等の操作を加えるとともに、誤入力のないよう注意を払った。また〈歌題集成資料類〉については紙焼きを入手し、その断片的な情報を一書の形になっているものと照合し、資料ごとの特性の把握に努めた。

データ化が完了したものから、随時、その内容の詳細な検討をおこない、各資料間の記載事項の重なりや項目の出入り、掲載順、注記の状況等を具体的に考究した。

４．研究成果

中世中期から近世初期にかけて相当数が流布したと考えられる歌題集成書類の収集、及びそれらの相互の関係や取材源の解明、各歌題集成書類の諸本分類、位置づけを明らかにすべく取り組んだのが本研究である。研究対象書目の紙焼きデータを入手し、フルテキストデータ化した上で、構成内容の検討を重ねた。主な研究成果は以下の通りである。

（１）『明題古今抄』については、2009 年 6 月刊行の『神戸女学院大学論集』第 56 巻第 1 号に井上本の翻刻を掲載した。同書については、陽明本、書陵部本との比較検討をおこない。成立時期、構成･内容、資料的価値とい

った面から考察を進め、同書が主として室町後期の組題を集成したものであり、従来の同期の和歌事蹟を補う内容を有する書であることを確認した。

具体的に述べると、現存三本を精査し、国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』②（外題『百首組題抜書』、1249－ミ函 57・2）等に残された校合注記と照合した結果、三本が共通するのは前半部分のみであり、本文の成長過程が書陵部本から陽明本・井上本の形態に至るものであることや、増補部分と考えるべき後半部分は陽明本だけに現存し、書陵部本は上下二冊本ではないこと、その成立時期は大永三（一五二三）年三月晦日以降後柏原天皇在位期間中と考えられること等を明らかにした。詠作機会、出題者に関する注記から、同書は後花園院や飛鳥井家歌人による出題に重点を置いて収載したもので、飛鳥井家周辺資料がもととなって編まれたものと推測される。また『後花園院御集』・『紅塵灰集』との比較からは、集中の歌の詠作年次が特定される場合や、五十首・三十首の組題の全容及び出題者が明らかになる場合が指摘でき、同書が極めて高い資料性を有するものであることが確認できた。以上の内容は学会にて発表するとともに、2011 年 7 月刊行予定の『文学・語学』第 200 号に「歌題集成書『明題古今抄』の伝本・構成とその資料的価値」という論題で公表の見込みである。

（２）国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』２冊（1249－ミ函 57）については内容を吟味し、２冊の内、特に①については七種の歌題集成史料が合写されたものであることを示し、個別の書の内容について、他の歌題集成書類と比較しつつ分析を加えた。その過程で、佚書と考えられていた『袖中題鈔』が国立歴史博物館蔵『組題集成』①に含まれていることを明らかにするとともに、同類の書が複数存在することやその内容が近世に版行された『和歌組題集』の一部となっていること等を明示した。以上の内容は学会にて発表するとともに、2010 年 6 月及び 12 月刊行の『神戸女学院大学論集』第 57 巻第 1 号及び第 2 号に「国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』①について（上）」「同（下）」という論題で公表した。

（３）上記（２）と関連して、近世に刊行された『和歌組題集』の増補部分を除いた本文が『袖中題鈔』であることを示し、その祖型の成立が中世に遡るものである考えられること、順次内容が増補されていく階梯が確認できることを明らかにした。また類似する内容をもつ歌題集成資料類が別題、無題の形で複数伝存していること等も新たに判明した。以上の内容は学会にて発表するとともに、2010 年 6 月刊行の『国語と国文学』第 87 巻第 6 号に「版本『和歌組題集』の祖型をめぐって―中世歌題集成書『袖中題鈔』の利用―」という論題で公表した。

（４）歌題集成史料類は、「十首題」（青山会文庫・384）、「類題恋雑」（祐徳稲荷神社・74, M）等について、検討を加えた。これらの歌題集成史料は、個別に歌題集成書や類題集との関係を探り、史料としての明確な位置づけをおこなうべきものであると考えられた。今後も検討を継続していく必要があることが確認できた。

（５）収集した歌題集成資料類のデータ整理と資料分析を綜合的におこなった。本研究で集積した内容を今後の研究活動に生かせるよう、とりまとめに努めた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①藏中さやか「歌題集成書『明題古今抄』の伝本・構成とその資料的価値」
『文学・語学』第 200 号（pp. 2-13）、2011 年 7 月 31 日刊行予定、査読有

②藏中さやか
「国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』①について（下）」
『神戸女学院大学論集』第 57 巻第 2 号（pp. 1-10）、2010 年 12 月、査読無

③藏中さやか
「国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』①について（上）」
『神戸女学院大学論集』第 57 巻第 1 号（pp. 1-16）、2010 年 6 月、査読無

④藏中さやか
「版本『和歌組題集』の祖型をめぐって―中世歌題集成書『袖中題鈔』の利用―」
『国語と国文学』（東京大学国語国文学会）第 87 巻第 6 号（pp. 33-47）、2010 年 6 月、査読有

〔学会発表〕（計２件）
①藏中さやか
「歌題集成書『明題古今抄』について」
全国大学国語国文学会第 102 回大会（平成 22 年度冬季大会）　（2010 年 11 月 28 日　宮城学院女子大学）

②藏中さやか

「『和歌組題集』、その祖型をめぐって」
2009 年度　和歌文学会第五十五回大会
（2009 年 10 月 25 日　朱鷺メッセ［新潟県］）

〔その他〕
資料翻刻
①藏中さやか
「井上宗雄氏蔵『明題古今抄』翻刻」
『神戸女学院大学論集』第 56 巻第 1 号（pp. 1–25）2009 年 6 月、査読無

ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　藏中　さやか　（KURANAKA SAYAKA）
　神戸女学院大学・文学部・教授
　研究者番号：８０３０９４２６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし